

## ピリピ人への手紙3章12-21節 「上に召される賞」

### 1A 目標を目指す競走 12-16

1B 追求している自分 12-14

2B 神に示された基準 15-16

### 2A 天から来られるイエス 17-21

1B 欲望を神とする者たち 17-19

2B 変えられる卑しい体 20-21

## 本文

私たちの聖書通読の学びは、ピリピ人への手紙 3 章に入っています。今朝は、後半の 12 節から 21 節を一節ずつ見ていきます。

ありきたりの質問をしますが、みなさんは、どんな人が好きですか？以前、教会の女性の方々と、率直に魅力のある異性について、互いに思っていることを分かち合ったことがあります。男性が、「女性はこんな男の人が好きだろう」というのと、実際は大きく違いますね。女性が、「男の人がこんな女性を好きだろう」というのも違いますね。意外な答えが来て、興味深かったです。

そのような恋愛感情とは違いますが、私個人が、聖書の人物の中で大好きな人がいます。ダビデです。そしてパウロも好きです。この二人に何が共通しているかということ、「一つのことに集中している」ということです。一つの目標があって、そこに情熱を傾け、そのためにはどんな犠牲も惜しまない姿です。ひたむきな姿です。ダビデの場合は、礼拝です。「詩 27:4 一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。【主】の麗しさに目を注ぎその宮で思いを巡らすために。」どんなことがあっても、彼は自分のものを持ちたくない。彼は願いました。サウルのいのちを自分の手で取りたくない、主ご自身のものだからとしました。すべてを主に注ぎだしました。

そしてパウロのひたむきさは、今、ピリピ人への手紙で見ているとおり、「キリストに見いだされる」ことです。「1:21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。」この方のすばらしさを知り、今までの自分にとって得だと思っていたものを損とまで考えました。そして、今は、この方の全てを知りたい、その復活の力を知り、この方の苦難にもあずかりたいとまで考えています。そして、パウロのこの追い求めは、死者からの復活にまで及んでいます。「2:10-11 キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」イエス様が、マルタに言われましたね。「ヨハネ 11:25 わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」イエスは、死者の中からよみがえられました。そのいのちをもって、私たちが死んでもよみ

がえる希望があります。それにもあずかりたいと願っているのです。

### 1A 目標を目指す競走 12-16

そのようなひたむきなパウロですが、彼には、生きていることはキリストであるということ、しばしば「競走」に喩えています。当時のギリシア・ローマの社会では、私たちが現代楽しんでいる以上に、スポーツを楽しんでいました。オリピックの祭典もありました。ローマの遺跡を見れば、どこにもギムナシオン(gymnasium)と呼ばれる、運動選手の訓練場がいたるところに残っています。その姿は、まさにひたむきです。目標が、あまりにもはっきりしています。その目標のために、どんな犠牲も惜しみません。何をやっても、結局、その目標を達成するための手段になります。多くの人が、どこかキリストを求めているようで、違うことにそれていく中でも、パウロはそれることがありませんでした。それは、パウロにとっては、キリストに見いだされることが目標であったからです。そのように、その目標に向かってひたむきに生きるのを、一心に走って、ゴールを切る選手に例えています。

### 1B 追求している自分 12-14

<sup>12a</sup> 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。

パウロは、義について、とても大切なことを話しました。それは、律法による自分の義ではなく、キリストを信じて、神から与えられる義を持つのだ、と言っていました。それは、自分自身の行いではなく、神の恵みによって贈り物として義をいただくのです。そこで大事なものは、それはまだ、得ていないのです。今は、信仰によって義と認められており、キリストの内にいる者であります。義そのものにはなっていません。しかし、キリストが正しいように、正しくなる時が来ます。それは、キリストが来られた時です。よみがえって、栄光の姿に変えられる時です。「Iヨハ 3:2 私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」この方を信じて、この方が来る時に神の義が与えられることを熱心に待ち望んでいます。

それで、パウロは信仰によって生きる者は、「すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。」と言っているのです。パウロこそ、霊的な巨人というか、もしキリスト者としてなすべきことを到達したと言える人は彼をおいて他にいないと言っても言い過ぎではないでしょう。しかし、彼は「ただ捕らえようとして追求しているのです。」と言っています。まるで求道者のようにして、捕らえようとして追求しているのです。

私たちキリスト者はしばしば、「イエスを信じて、それで永遠のいのちを得たのだから、この世においてはやることは特にない。」とみなします。天国への切符をもらったのだと見なすのです。それで、すでに得たかのように、完全にされているかのように生きます。天国に入ることが目標であり、

その保証を取り付けたのだから、というのです。けれども、それは大きな間違いであることを、前にお話ししましたね。私たちは信じて救われました。しかし、その神の救いは、私たちの従順を通して明らかにされます。神が、私たちの内に働いて、志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。タラントをあずかって、商売をして利益を付けて主人にお返しする必要があるのです。

キリスト者として、自分が足りないと感じている時は幸いです。その時は、飢え渴いて、追及して、得ようと努めています。けれども、自分の追い求めている者を手にしたかのように思えた時に、まるで自分が得た、完全にされたと感じてしまうのです。悪い意味で、満足してしまうのです。今の自分で十分だ、と。その時は生きていると思っているけれども、実は死んでいます。信仰というのは、生きています。自分がもう到達したと思った時に、ちょうど血液が体内で止まるように、信じていないという状態を自分で作っています。そして霊的に死ぬのです。

自分は信じているからと思っていますが、よく聞くと、それは、「私は、以前、洗礼を受けているから。」「イエス様を信じますと、告白したから。」とか、キリストに信頼しているのではなく、自分のしたことに頼っているからです。神の義を求めているのではなく、いつの間にか自分の義に頼り始めているのです。イエスを信じるということは、初めに信仰を告白した時から、ずっと息をするように信じ続けることです。自分は頼りにはならない、だから、一日一日、いや一瞬一瞬、あなたに頼らないとやっていけません、と告白していることです。

<sup>12b</sup> そして、それを得るようにと、キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。

そうです、自分が今、信じているというのは、イエス様がそうしてくださったからです。私を捕らえてくださったからです。それは、あたかも、ある人が競走選手にすべく、自分を見つけ出し、選んだかのようなのです。ですから、私たちはキリストを得る、つまり、この方に、顔と顔を合せてお会いすることが目標になって、この地上の歩みをするのです。主の救いをいただいて、それが良い行いによって私の生活に現れるように努めます。そして最後に、戻って来られる主に報いをいただきます。そのために選ばれ、捕らえてくださいました。

<sup>13</sup> 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えることはありません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、<sup>14</sup> キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。

パウロは、今の時点で、捕らえたと考えていませんでした。しかし、他の手紙で捕らえたと言っている箇所があります。テモテ第二 4 章 7 節です。「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」けれども、これを言ったのはいつだか分かりますか？「私が世を去る時が来ました」と前の節で言っているのです。彼が、皇帝ネロによって死刑に処せられることが確定し

ていました。だから、走るべき道のりを走り終えたと言っているのです。これは、第二回目にローマの牢に入れられた時で、今ではありません。彼は、第一回目にローマで囚人になっている時、釈放されて、ピリピの人たちに会うことを確信していました。ですから、自分はまだ捕らえたとは考えていなかったのです。世に残されているのだから、主にあつてやることはまだあると知っていました。

以前、まだ 30 代だったでしょうか、若い牧師さんが難病にかかりました。だんだん体が動かなくなってきました。その牧師さんに、私たちの知っているアメリカ人の牧師は、チャック・スミスの説教の翻訳をさせました。「彼には、まだやることがある。」と言いました。上半身しか動かなかったのですが、上半身は動くのです。自分は役に立たないとか事故憐憫に陥る暇は、その牧師さんにはありませんでした。死ぬ時まで、あるいは生きていてイエス様が戻って来る時まで、まだ捕らえたなどとは言えないのです。

そして、「ただ一つのこと」と言っていますね。ここで、ダビデと同じひたむきな思いです。ダビデは、主の家に住むことがただ一つのことでした。サウルに追われても、逃げているところでそれを常に願いました。パウロは、「キリスト・イエスにあつて神が上に召してくださるという、その賞をいただく」ということが、目標になっていました。主ご自身のところに、私たちが連れて来られる時に、主は私たちに、賞を与えます。冠を授けます。報いを与えられます。



「上に召してくださるという、その賞」(upper calling of God) というのも、ローマ帝国に生きている人々にとっては、ありふれた光景でした。競走で優勝した人は、それを観戦していた観衆の前で、冠を受けます。冠を授けるのは、皇帝であったり、総督であったりします。上の写真は、イスタンブールにある、ローマの競馬場にある塔の一部です。そこに、皇帝が月桂樹の冠を授ける場面があります。優勝者は、皇帝の座とまで階段を上っていき、その座で冠を受け取ります。そしてもう一つの写真は、映画「ベン・ハー Ben Hur」の一場面です。ベン・ハーが、戦車の競走で優勝し、総督ピラトから冠を受けている姿です。これが、「上に召されて、賞を受け取っている」姿です。

これと同じように、神が天の御座に着いておられます。私たちが天に引き上げられます。そして、そこで賞を受けます。いのちの冠、義の冠など、聖書にはいろいろあります。報いを受けます。この方に見えるその時まで、私たちは、その目標を目指して走っているのです。

その時の走っている姿を見てください。「うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし」しているといます。うしろを振り返っては、競走で必ず負けてしまいます。そして前に向かって、身を伸ばしてでも賞を得ようと努めるのです。競泳の選手は、爪を伸ばすということを聞いたことがあります。最後にゴールに触れる時に、その爪の長さの差で勝敗が決まることもあるからです。うしろのものを見ている暇など、ありません。

「後ろのものを忘れる」とは、記憶をなくすことではありません。パウロはきちんと、自分がかつてパリサイ人であり、律法の義については非の打ちどころがなかったなど、過去をはっきり覚えています。忘れるとは、過去にとらわれないということです。彼の人生にとって、過去のことは得であったものであったけれども、キリストを知ったことによって、それらは損と思うようになりました。それに囚われていたら、信仰による救いは受けなかったでしょう。「私が何十年もかけて、これまでやってきたことが、この信仰の一步を踏めば無意味になるではないか？」と思うかもしれません。しかし、一步を踏むのです。これは、後ろのものを忘れるということです。

そして、「前のものに向かって身を伸ばしている」というのは、先ほど話したように、今、自分の置かれているところで、主のみこころを、知恵をもって行っていく、ということです。難病で下半身が動かない時、上半身は動くのです！ローマの牢に入れられている時に、福音宣教を、自分を鎖でつないでいるローマ兵に伝えるのです。そして、何も変化が見えないように見える時も、それでも主がここにおられると信じて、やりつづけます。

ハガイ書には、神殿の再建工事が反対によって中断を強いられた人々が、自分たちの家を建てていました。まだ主の時ではない、みこころではない、としていました。しかし、それは自分が勝手にそう思っただけなのです。ハガイが預言しました。そして彼らは主を恐れて、工事を再開しました。エズラ記には、改めて反対の声が周囲の民から来たのですが、「ユダヤ人たちの長老たちの上には彼らの神の目が注がれていた」とあります(5:5)。工事を中止させることができなかったのです。「これこれがあるから、みこころを行えない」と言っている時に、よくよく考えてください。はたして、それは妥当な理由なのか？ということです。自分で勝手に思い込んでいませんか？前に向かって進みましょう。

## 2B 神に示された基準 15-16

<sup>15</sup> ですから、大人である人はみな、このように考えましょう。もしも、あなたがたが何か違う考え方をしているなら、そのことも神があなたがたに明らかにしてください。<sup>16</sup> ただし、私たちは到達し

たところを基準にして進むべきです。

パウロは、一心に前に向かって走り、賞を得るべく走ることに、それが霊的に大人、成熟した人の取っている立場なのだとのことです。完成されているのではない、捕らえたのではないという立場こそが、実は大人の立場なのです。成熟したキリスト者などと言え、何か、すべてを体得したかのようなイメージを抱きますが、決してそんなことはありません。むしろ、以前にまして、キリストを得るべく、追求している姿が大人なのです。

そしてパウロは、同じ思いになってくれることを願っています。「みな、このように考えましょう。」と語っています。けれども、このことはあくまでも、神が明らかにしてくださらない限り、同じ思いになることはできないことを知っています。ピリピ人への手紙のテーマの一つが、同じ思いになることであることを思い出してください。パウロは、一つ思いになることを教えていますが、けれども、彼自身の思惑で一つにさせることはできません。神が示してくださらない限り、一つにならないのです。それぞれが到達したところにしたがって、前に向かって走っていくことが大切ですね。

## **2A 天から来られるイエス 17-21**

このようにして、パウロは、3章1節から続いている、肉を誇っている偽の教師たち、ユダヤ主義者についての警戒を語りました。信仰によって生きるというのは、絶えず主を追い求めていて、自分自身に頼ることはできません。それに対して、ユダヤ主義、律法主義は自分のしたことに頼っています。そして次に、パウロは、また別の形で教会にはびこっていた、偽りの教えについて警告する言葉を書いています。

それは、無律法主義(antinomianism)と呼んだらよいでしょう。律法は全く無視して構わないという考えです。恵みによって救われたのだから、信じていれば、何をやっても自由だ、自分の欲することを何でもやればよい、という考えです。グノーシス主義(Gnosticism)の一種です。神は霊についてのことしか関わりがない。肉は元々、悪であるから、肉についてのことは何をしても関わりがない、とするものです。知識だけは多く持っていますが、自分たちの生活はまるでそれに合っていない人たちのことです。生活がまるでなっていないではないか？という、「そういった肉の生活についてのことは、どうでもいいのだ。精神的なこと、霊的なことが大事なんだよ。」ということです。例えば、結婚外の恋愛で、他の男あるいは女と同棲していても、「いや、愛し合っているのだからいいのさ。自分の妻も愛しているよ。」などというのは、霊と肉を分けてしまっています。

当時の異邦人の生き方は、道徳的にもものすごく乱れたものでした。ですから、イエス様を信じると、二つの両極端に走る傾向があります。そういった生活から免れるために、いろいろな規則に頼ろうとすることです。ユダヤ教の中にある律法主義は魅力的になります。もう一方では、「そのままでもいいではないか、自由にやろう。」とすることです。それで妥協する道を選びます。どちらも、肉に

拠り頼むことでは共通しています。律法を自分の肉の力で行おうとしていること、また肉の欲望のままに生きること。しかし、信仰によって生きるとは、自分に拠り頼まずに、御霊によりたので、この方が自分を変えてくださる力があって、それでイエス様の命令に従う人のことです。これは、今の日本の社会と文化に生きている人ならば、同じような誘惑があることに気づくでしょう。それで、次のパウロの警鐘にも、耳を傾けなければいけません。

#### 1B 欲望を神とする者たち 17-19

<sup>17</sup> 兄弟たち。私に倣う者となってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。

キリストに倣う生き方を見せて、手本になる、模範になることは、とても大事です。福音を聞いて信じて、自分の周りに、キリストに倣う生活がどういうものか、全く見たことがなければ、どのようにして、イエス様の命令に従えばよいか分からないでしょう。ですから、日々、私たちはイエス様との時間を取り、みことばを見て、祈って、御霊によって語られて生活する時に、自分と自分の周りに、小さな文化が生まれます。他の人々にない新しい習慣が生まれます。それを大切にしていくなければなりません。そして、手本を見る、模範があるというのは、他の人々が信仰の歩みをする時にもものすごく大事です。周りは、全く違う行動を取っているのに、そうではない行動ってどうやって取るのだろうか？という疑問が出てきます。けれども、だれかがその手本を見せることで、それに倣うことができます。全てを同じようにしなければならぬのではありませんが、自分に基準を持つことができます。

例えば、私は、信仰を持ったばかりの時に、祈るというのは、スタンドグラスのある教会堂の中で献げるものだと思っていました。そして、祈る内容は高尚なものでなければいけないと思いました。けれども、大学のキャンパスで、他の先輩のクリスチャンたちの祈り会がありました。そこでは、「トイレで祈ると、良く祈れるんだよな。」とか、口内炎が出来た人のために癒しのために祈るとか、ものすごく日常的なことを祈っている姿を見て、すべてのことを主に願いを持って行きなさいという、聖書の勧めの意味が分かったのです。

当時、ローマ社会では、疫病が流行ったら、それは神々の祟りだと思っていました。ローマで疫病が流行った時は、ほとんどが町を出て行きました。しかし、そこに残っていた人々がいます。キリスト者です。出ていくこともできない貧しい人に施しをし、病の人の看病をしました。自分が感染してしまうかもしれないのに、復活の信仰を持っていたので、果敢に愛の行為をしていったのです。こういったことは、ローマの人々は全く考えることができませんでした。それから、望まない妊娠をして、赤ん坊をゴミ捨て場に捨てるのは当たり前でしたが、拾って育てたのはキリスト者です。イエス様が、「この小さき者にならなければ、神の国に入れぬ」と言われたことを、そのまま実践したのです。ですから、キリスト教会から後に、孤児院ができたか、病院が生まれて行ったりしました。

手本があり、その中で新しい文化が創り出されたのです。

<sup>18</sup>というのは、私はたびたびあなたがたに言ってきたし、今も涙ながらに言うのですが、多くの人がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。

パウロは、喜ばなさいという勧めを手紙の中で何度となくしていますが、しかし、ここでは、涙を流して言っているんですね。喜んでいるというのは、あくまでも主にあって、であることを思い出してください。イエス様は、エルサレムがメシアを受け入れないことを見て、涙を流されていました。罪に対して涙を流さないでいることはできません。

なぜ「キリストの十字架の敵」と呼んでいるかという、キリストの十字架によって、私たちの肉が情欲と共に十字架につけられたからです。「ガラ5:24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。」このキリストの十字架のわざを、肉の欲にしたがって生きることによって無駄にしているのです。

<sup>19</sup> その人たちの最後は滅びです。彼らは欲望を神とし、恥ずべきものを栄光として、地上のことだけを考える者たちです。

当時の異邦人の生き方は、自分の欲のままに生きる、奔放に生きることが、そのまま神になっていました。ギリシアの神々は、人間以上に欲望に強い者たちです。そして、恥ずべき行いを、誇っていました。その生き方をよいとしていた、自由にすればよい、律法から解放されたのだから、としていたのが、パウロが警戒している教えです。

そして、「地上のことだけを考える」と言っていますね。ここでパウロは、先ほどの話に戻っています。上から召されることです。天におられるイエスのところに、私たちが召されるということです。この天を思いなさいとコロサイ書でパウロは勧めています。地上のことを思わないでいなさい、と戒めています。「コロ 3:1-2 こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。」

## 2B 変えられる卑しい体 20-21

<sup>20</sup> しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。

「私たちの国籍は天にあります」という言葉は、ピリピの人たちにとっては、かなり大きなインパクトを持っていたと思われます。ピリピがローマの植民都市であることを思い出してください。御国の



市民として生活しなさいという勧めを、1 章 27 節でしていましたが、それは、ローマから離れていても、ローマのモデル都市として機能していたからです。そこで生まれた人はみな、生まれながらのローマ市民です。ローマの慣習が採用されています。だから、パウロとシラスが捕らえられた時に、彼らがユダヤ人であって「使徒 16:21 ローマ人である私たちが、受け入れることも行うことも許されていない風習を宣伝しております。」と訴えられたのです。ローマの市民権があることを誇っていたのです。

しかし、私たちは天に市民権があるのだと言っているのがここなのです。地上においては、一時滞在、寄留しているようなものなのだ、ペテロは第一の手紙で言っています(1:17 参照)。そして、天からキリストが救い主として来られるのです。私たちを、滅びゆく世から救い出すために来られるのです。「I テサ 4:16-17 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

<sup>21</sup> キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。

キリストは、万物をご自分に従わせる力を持っておられます。この前、平日の学びでは黙示録 19 章を読みましたが、主が、世界から集まって来た軍隊を、ご自分の口から出る剣によって、一気に滅ぼされます。その力をもって、私たちの今の肉体を、ご自分に似せた体に変えてくださいます。これが、パウロが話している「神が与えてくださる義」であります。今は、キリストのうちにあって義とみなされていますが、将来は、義そのものに変えられるのです。

今の肉体を「卑しいからだ」と言っていますね。これは、肉体は朽ちていくからです。若い方はあまり分からないかもしれませんが、だんだん衰えるのは年を経るごとに良く分かってきます。そして、いつか滅んでしまうのです。そして何よりも、パウロがローマ 7 章で言っているように、自分のからだには罪の法則(law)が働いていると言って、嘆いているのです。アダムから受け継いだ罪の性質を未だ宿している体を持っています。だから、卑しいからだです。

それに対して、主が天から降りて来られたら、私たちは新しいからだに変えられます。さなぎが蝶になるように、自分自身は変わらないのですが、その有様が変わるのです。そのからだとは、「自分の栄光に輝くからだと同じ姿」とあります。キリストが復活されて、栄光に輝く体と同じように変えられるのです。だから、私たちが肉の欲にしたがって歩むことがいかに空しいかを物語っています。まず、キリストは万物をしたがわせる力を持っています。だから、肉の行いを御霊の力によって殺すことができます。そして、この肉は肉の欲とともに滅びるのです。そこに自分の思いを使っ

てはいけない、ということです。天から主が来られ、私たちは変えられるのですから、今の肉体を御霊に従わせるのです。十字架につけてしまったのですから、肉のわざを捨ててしまうのです。

このようにして、私たちは自分の終わりがどのようなになるかを見ることが出来ました。上に召される方が賞を与えてくださいます。そしてこの方と同じ姿に変えられます。そして、その生き方を今、この地上を歩んでいる時に実践して、他の人々の手本となっていきます。また手本となっている人々に自分たちも倣っていきます。